

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、主に古岳火口付近を震源とする火山性地震が4月以降多い状態で経過していましたが、8月中旬頃から減少しています。また、その他の観測データにも火山活動の活発化を示す特段の変化は認められません。

これらのことから、新岳及び古岳の火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（20日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

なお、火山活動は低下していますが、古岳付近を中心に火山性地震がやや多い状態で経過していますので、今後の火山活動の推移に留意してください。

【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、主に古岳火口付近を震源とする火山性地震が4月以降多い状態で経過していましたが、8月中旬頃から減少しています。また、振幅の大きな地震も発生していません。その他の観測データにも火山活動の活発化を示す特段の変化は認められません。

火山活動の低下が認められることから、本日（20日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

新岳と古岳の火口内及びその周辺では引き続き地熱域が認められています。10月10日に鹿児島県の協力によって実施した上空からの観測では、古岳において、2023年6月からの火山活動活発化後、主に火口内で地熱域の拡大した状態が継続していることを確認しました。11月5日から7日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近及び古岳火口周辺で引き続き地熱域を観測しましたが、前回（10月23日）の観測と比べて特段の変化はみられませんでした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年9月以降次第に減少しています。2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、検出限界を下回る日も時々みられています。GNSS連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

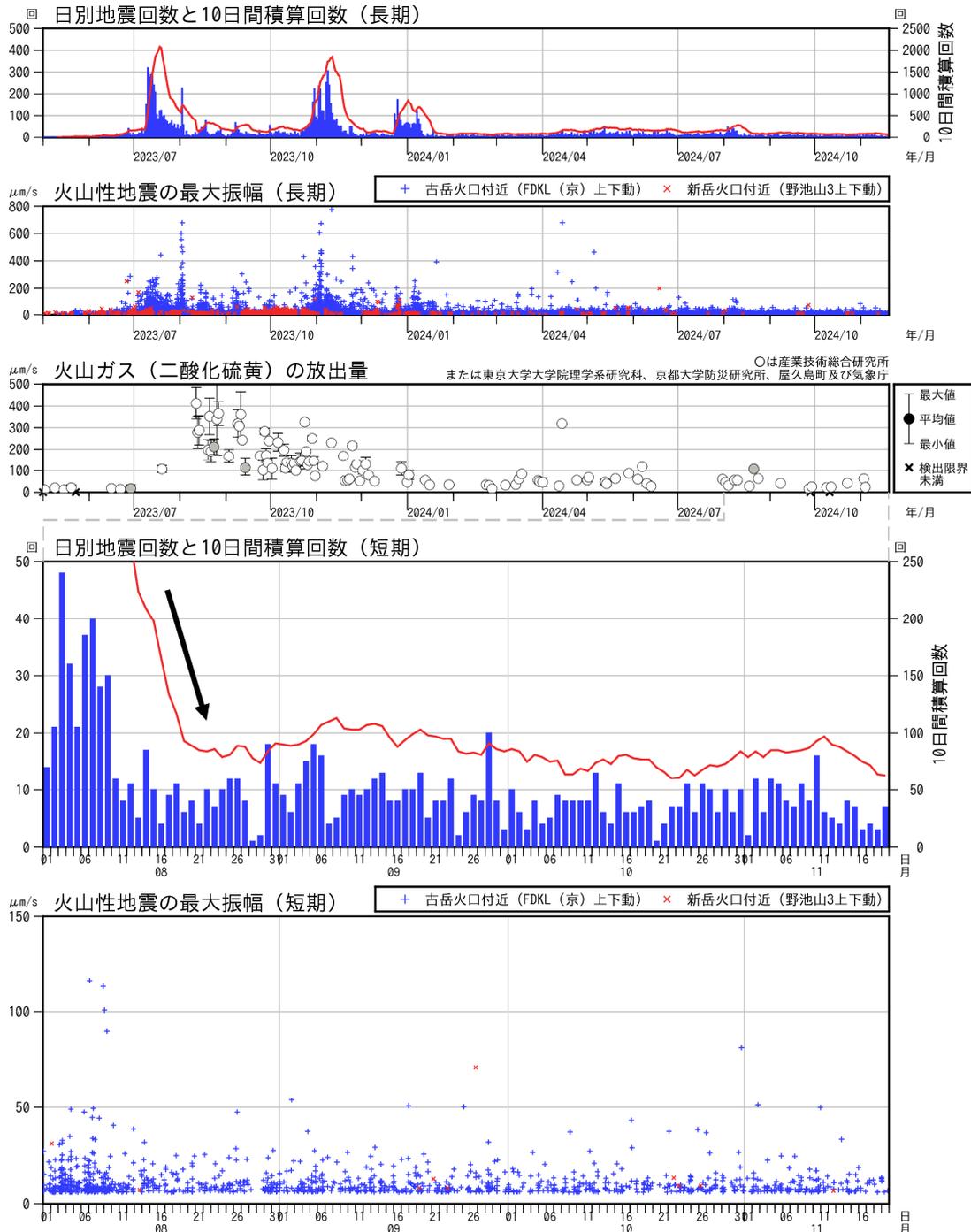


図1 口永良部島 火山性地震の発生状況と火山ガス（二酸化硫黄）の放出量
（1～3段目：2023年5月1日～2024年11月19日、4～5段目：2024年8月1日～11月19日）

- ・火山性地震が4月以降多い状態で経過していましたが、8月中旬頃から減少しています。
- ・火山性地震の震源は主に古岳火口付近で発生しており、やや多い状態で経過しています。新岳火口付近においても少ないながら発生しています。振幅の大きな地震は発生していません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年9月以降次第に減少しています。2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、検出限界を下回る日も時々みられています。

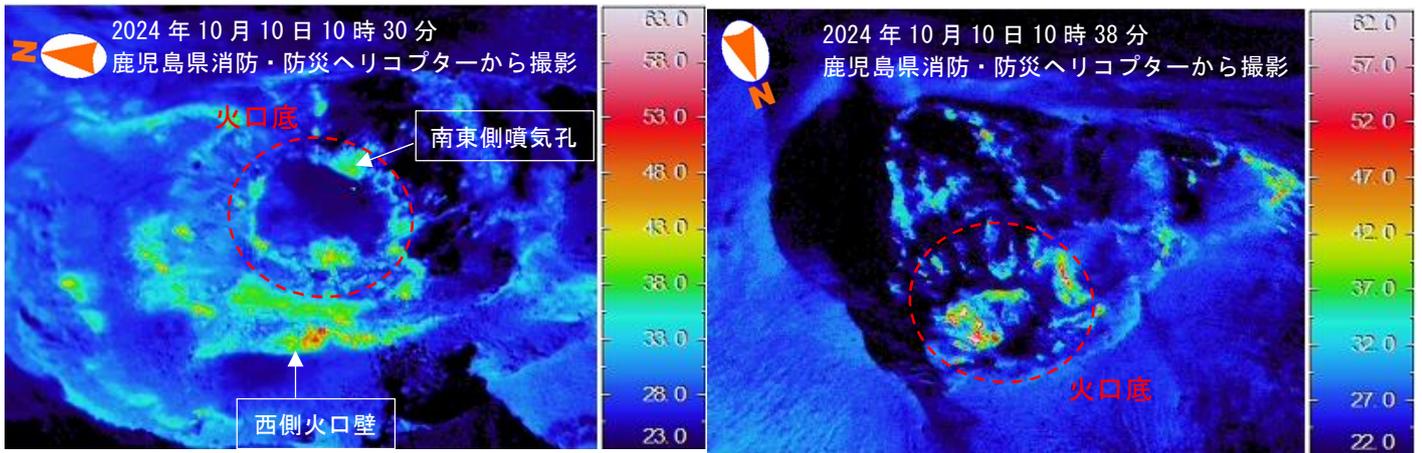


図2-1 口永良部島 古岳火口及び新岳火口の地熱域の状況（10月10日 左図：古岳、右図：新岳）

10月10日に鹿児島県の協力によって実施した上空からの観測では、新岳及び古岳とその周辺で地熱域を確認しました。2024年5月の観測と比較して地熱域の分布や温度に特段の変化は認められませんでした。

赤外面像の温度スケールは非地熱域の平均温度を元に設定しています。

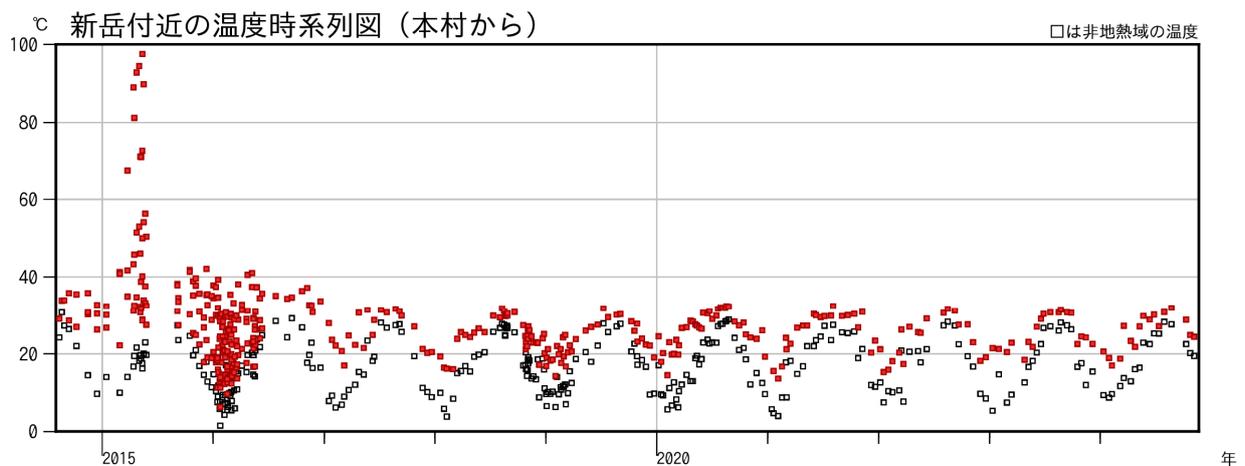
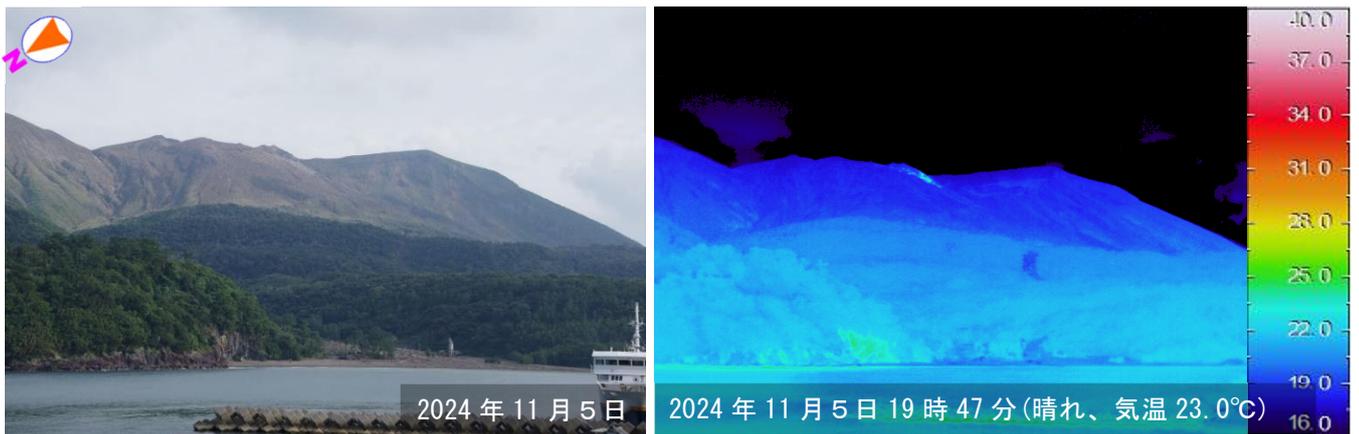


図2-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

11月5日から7日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を観測しました。前回（10月23日）の観測と比べて特段の変化はみられませんでした。

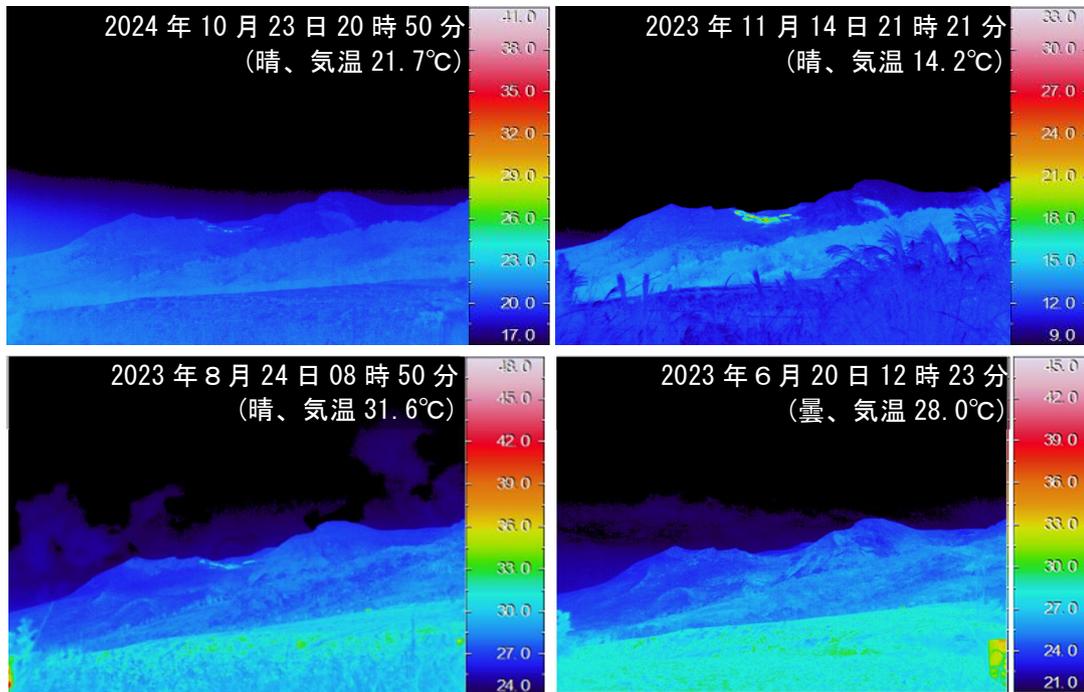
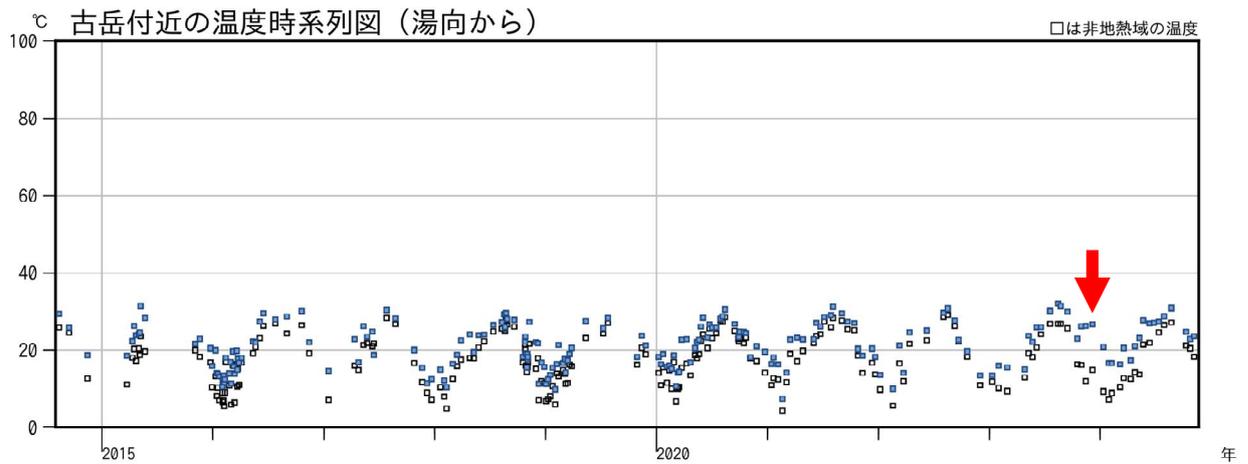
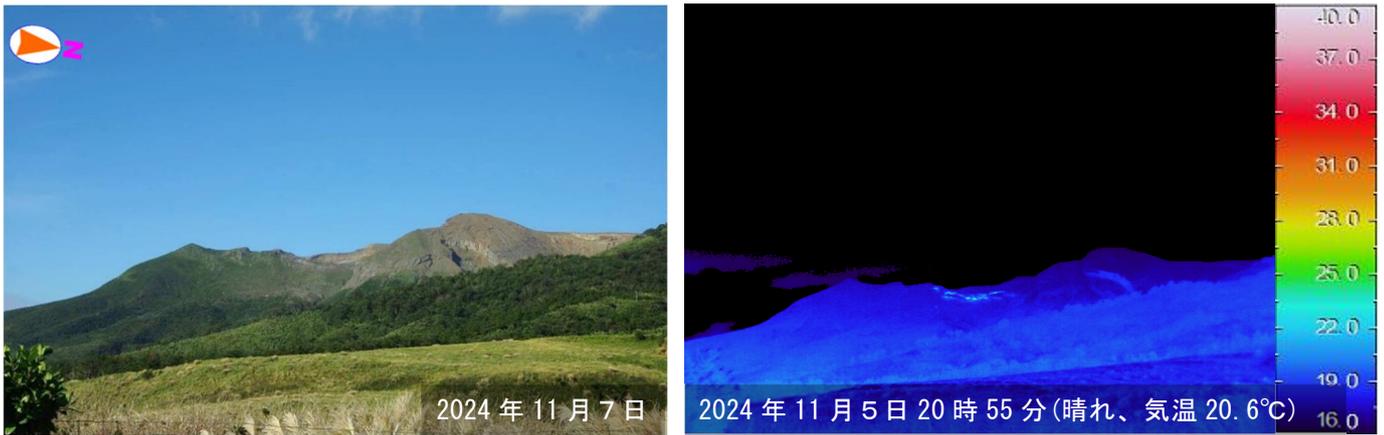


図2-2 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況(湯向から観測)

- ・11月5日から7日にかけて山麓から実施した現地調査では、前回(10月23日)の観測と比べて古岳火口周辺の地熱域に特段の変化はありませんでした。古岳火口からは火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しました。
- ・2023年12月頃にかけて一時的な温度の上昇(赤矢印)がみられました。

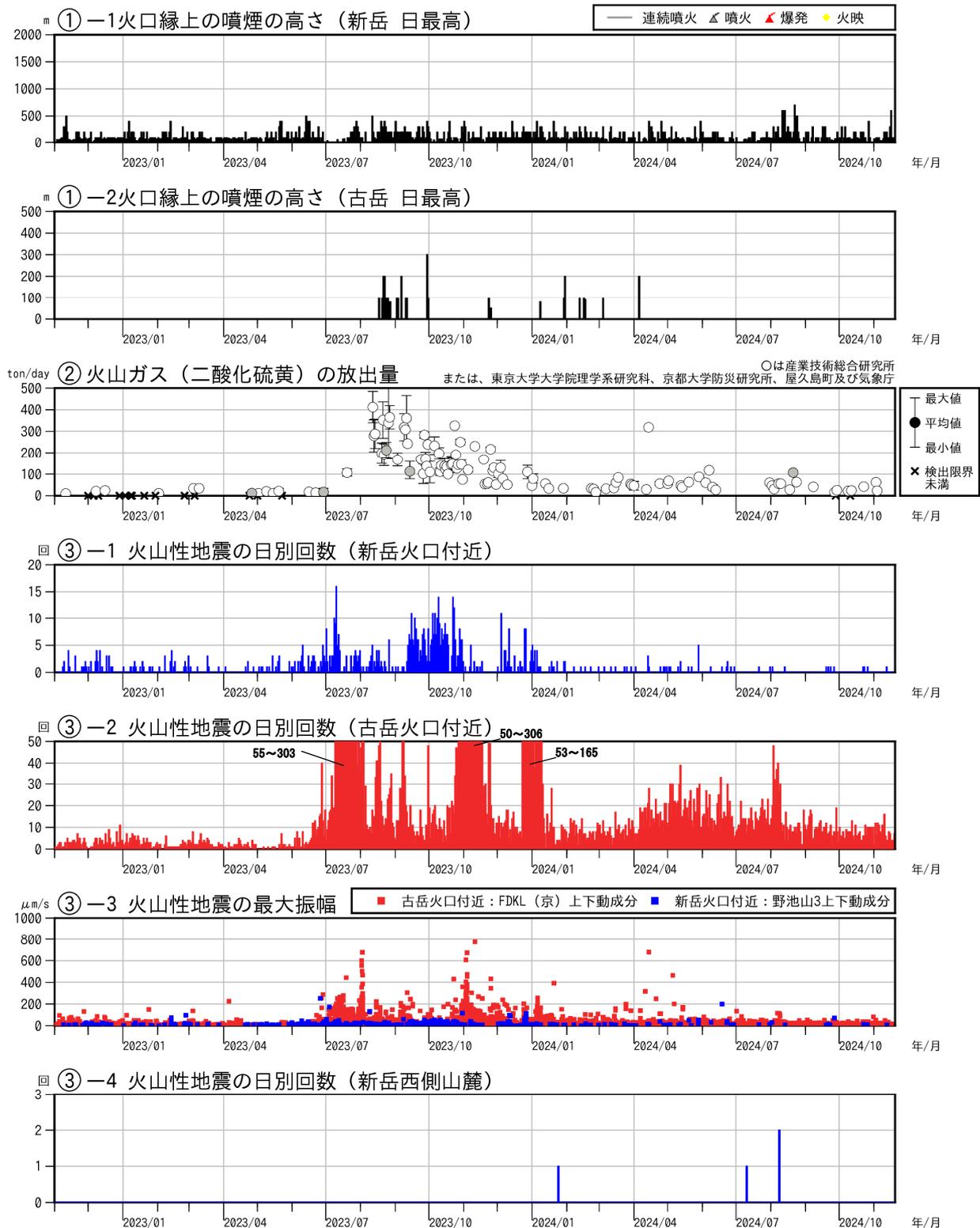


図3 口永良部島 最近の火山活動経過図 (2022年11月～2024年11月19日)

<11月以降の状況>

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 600mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は確認されませんでした。現地調査において火口縁をわずかに越える白色の噴煙を観測しました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス (二酸化硫黄) の1日あたりの放出量は、20～60トンで推移しています。
- ・古岳火口付近の火山性地震はやや多い状態で経過しています。新岳火口付近の地震は少ない状態で経過しています。振幅の大きな地震は発生していません。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は9月以降、観測されていません。

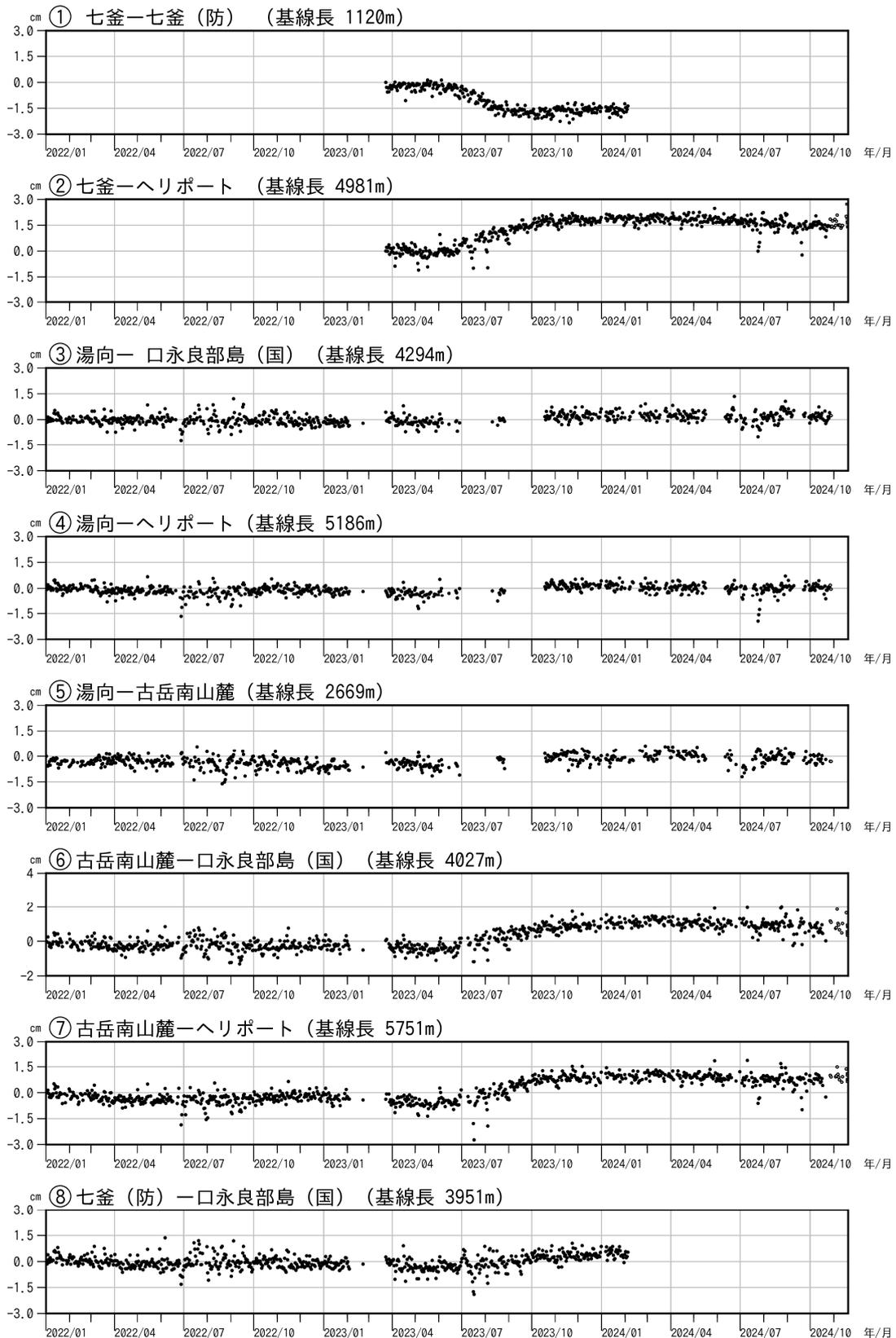


図4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2022年1月～2024年11月19日)

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

これらの基線は図5の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事(七釜観測点)に伴うステップを補正しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

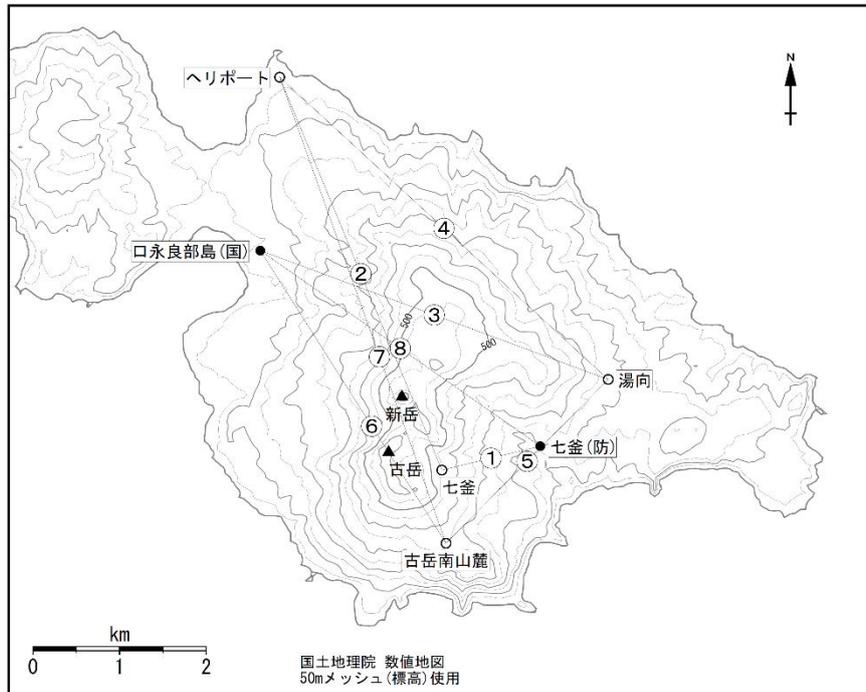


図5 口永良部島 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

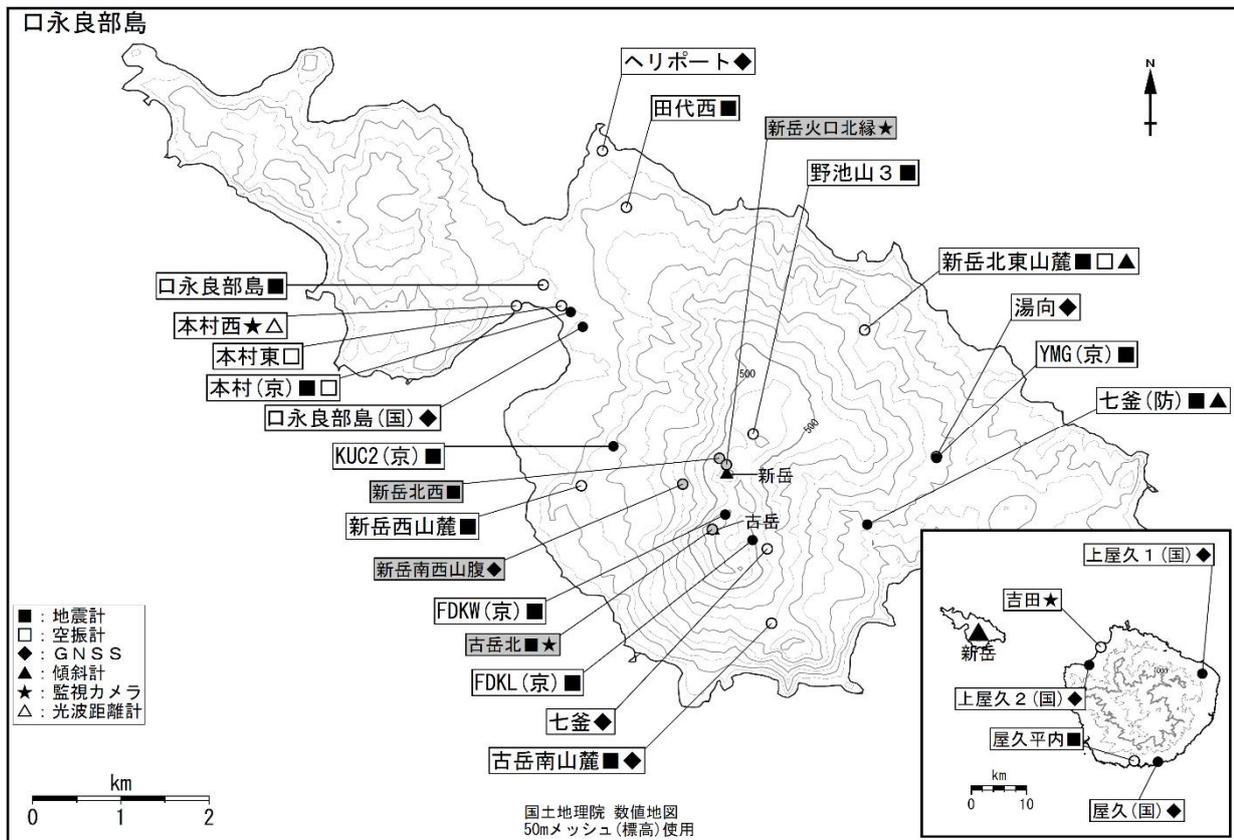


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。